

授業科目名 <英訳>	フランス語学フランス文学(特殊講義) French Language and Literature (Special Lectures)	担当者所属・ 職名・氏名	人文科学研究所 准教授 森本 淳生
---------------	---	-----------------	-------------------

配当 学年	3回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	特殊講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	------	----------	-----

題目	レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと 近代文学 の生成 文学場・周縁性・両義性
----	-------------------------------------

[授業の概要・目的]

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ(1743-1806)はポスト・ルソー世代のマイナー作家で、とりわけ浩瀚な自伝『ムッシュー・ニコラ』を書いたことで知られます。彼はブルゴーニュ地方の農民の出身で印刷工としての修行を積み作家となりました。18世紀から19世紀末にかけては識字率が上昇し「誰もが書き、誰もが読む」時代が到来しますが、そうしたなかで、宗教や血統による助けがなく、芸術的卓越性の面でもルソーのような評価を得られなかったレチフは 近年発掘されてきた農民・職人出身で自伝的テキストを残したジャムレー=デュヴァル、メネトラなどと同様 「庶民」がものを書くようになるプロセスを体現する存在だと考えることができるでしょう。宗教・血統・芸術にかんする後ろ盾なしに作品を書き、自分の「筆一本で」作家として身を立てようとしたレチフのうちには、近代的なエクリチュールの主体にかかわる諸問題が集約的に現れているはずです。本講義では、レチフの諸作品の読解を通してフランスにおける 近代文学 の生成について再考します。

フランス18世紀は、政治的には官僚制的中央集権化を進める王権が高等法院との対立を激化させ、宗教的には自然宗教や無神論の台頭した時期であり、文学・芸術に関わる領域では、ルイ14世時代に確立された古典主義詩学が解体されて理性に対する感情の優位が説かれ、出版・ジャーナリズムが隆盛し公論(1' opinion publique)が成立するとともに、読者/公衆(le public)が成熟していくなかで作家の自律化が進み、文芸(belles lettres)から文学(littérature)への変化が起こった時代でした。こうしたプロセスについてはもちろんすでに膨大な研究の蓄積があります。レチフ研究についてはピエール・テスチュの古典的研究(『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学的創造』)や日本における植田祐次の先駆的研究(『共和国幻想』)にくわえ、近年では、ベルクマンやル・ボルニュの充実した著作*が刊行される一方、作品の批評校訂版が相次いで出版され研究の隆盛が見られます。

精神分析的な視角から父子関係の問題に着目するベルクマンは、レチフが父との系譜・相続関係に執着する一方で、父との断絶を欲望し「自己自身の息子」になるという自己産出を夢想していたと指摘し、レチフの錯綜したテキスト群が主体の欠如の周囲に紡がれるファンタスムの形成物であると論じています。ル・ボルニュは、古典主義的な諸ジャンルが解体していく時代状況のなかで、文学場において周縁的位置にあったレチフは、ジャンルを交雑(hybridation)させて革新的な作品を書くことでアカデミーやサロンなど既成の制度に反抗し、しかるべき地位を獲得する戦略をとったと考えます。本講義では、この両者の議論を批判的に受け継ぐことで出発点の仮説としたいと考えます。すなわち、当時の文学場におけるレチフの周縁的位置に着目しつつも、両義性をはらむレチフのテキストを作家の地位獲得のための戦略としてだけでなく、むしろ周縁的位置自体がもつ両義性と相関関係にあるものとして理解し、ベルクマンが強調したレチフのテキストの揺れをこの周縁性の観点から理解しようと試みることです。

* Gisèle Berkman, *Filiation, origine, fantasme*, Honoré Champion, 2006.

Françoise Le Borgne, *Rétif de La Bretonne et la crise des genres littéraires (1767-1797)*, Honoré Champion, 2011.

[到達目標]

レチフの諸作品の読解を通じて、文学的にも政治的にも精神史的にも大きな転換期であった18世紀フランスについて一定の知識と理解を習得する。

講義で用いる種々の方法論(テキスト分析、詩学/美学、精神分析、文学場の社会学)について学ぶ。

フランス語学フランス文学(特殊講義) (2)

【授業計画と内容】

1. イントロダクション：レチフ・ド・ラ・ブルトンヌとは誰か？【1週】
2. 転換期としての18世紀フランス
 - (1) 自伝的エクリチュールの生成：宗教的自伝、貴族の自伝、芸術家の自伝【2週】
 - (2) 古典主義の解体と「市民劇drame bourgeois」の成立【3週】
 - (3) 「公論」opinion publique」の誕生【2週】
3. 「文学場」とマイナー作家の戦略【3週】
4. 近代におけるエクリチュールと主体【3週】
5. まとめ【1週】

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点及び達成度】

レポート。

【教科書】

授業中に指示する

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学習(予習・復習)等】

講義では一部フランス語テキストを購読します。適宜指示しますので、事前に予習してください。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。